



日本記者クラブ
著者と語る『中国再考 その領域・民族・文化』

中国とは何か 「現代」「国家」「文化」におけるジレンマ

葛兆光
復旦大学文史研究院院長

2014年11月10日

第26回アジア・太平洋賞大賞を受賞した上海の復旦大学文史研究院院長、葛兆光（かつ・ちょうこう Ge Zhaoguang）氏が2014年11月10日、日本記者クラブで記者会見を行いました。「著者と語る」シリーズの一環で、葛氏は受賞作『中国再考 その領域・民族・文化』の内容に沿って「世界観」「国境」「歴史」「周辺」などのキーワードを基に、「中国とは何か」を語りました。記者会見は、北京で安倍晋三首相と中国の習近平国家主席が会うという2年半ぶりの日中首脳会談が実現した当日という絶妙のタイミングでしたが、葛氏は中国に「天朝」思想からの脱却を求める一方、領土問題などで摩擦が続く周辺諸国と中国の双方に理性ある対応を促しました。冒頭スピーチの全文と主な質疑応答のやりとりを掲載します。

司会：坂東賢治 日本記者クラブ企画委員（毎日新聞社論説室専門編集委員）

通訳：大森喜久恵 サイマル・インターナショナル

日本記者クラブ Youtube チャンネル

<https://www.youtube.com/watch?v=zdzvWhaZTtM>

この会見詳録は一般社団法人アジア調査会の協力と了解を得て「アジア時報 2014 年 12 月号」

（アジア調査会発行）より転載しました。

©公益社団法人 日本記者クラブ

**司会：坂東賢治 日本記者クラブ企画委員
（毎日新聞社論説室専門編集委員）** 著者と
語るというシリーズで、本日は、上海・復旦
大学の文史研究院の院長をされております
葛兆光先生においでいただきました。岩波現
代文庫から出版された『中国再考』という本
が、今回アジア・太平洋賞の大賞を受賞され、
授賞式が明日行われるということで、訪日さ
れたのを機会に是非お話をうかがいたいと、
おいでいただきました。今日は2年半ぶりの
日中首脳会談が開かれた日で、非常にタイミ
ングもいいと思いますけれど、拡大する中国
といいますか、葛先生は「膨張する」という
言葉が使われていますけれども、その中国の
意味するもの、あるいは中国と周辺国の関係
の意味するもの、それを歴史的観点からいろ
いろ説かれている本です。今の日中関係を考
えるうえで非常に示唆に富むお話があるの
ではないかと思います。今日はじっくりお話を
聞かせていただき、そのあと質疑を行いた
いと考えております。まずは葛先生の方から
本についてのお話を伺いたいと思います。よ
ろしくお願いいたします。

中国が直面する 10 大トラブル

葛兆光・復旦大学文史研究院院長 みなさ
ま、こんにちは。このたび私が書きました『中
国再考』という本について、なぜこれを書い
たのか、その内容、私の考えていることにつ
いて極めて簡潔にご紹介させていただきます。
今や中国の経済力が高まり、国力が高まっ
ていますが、そうした中でむしろ中国の国
内では中国が今直面している問題に関する
議論が高まっています。私はこの問題を「10
大トラブル」と言っています。「10 大ト
ラブル」とは何か、簡単にご紹介します。ま
ず一つは高句麗の問題。これは朝鮮および韓
国と関わりのある問題です。第二は東海、釣
魚島（尖閣列島）、つまりいわゆる東シナ海
と釣魚島の問題ですね。三つ目は南海、南シ
ナ海ですね。これはベトナム、フィリピンと
の間の問題です。四番目は内モンゴルと外モ
ンゴルの問題です。五番目は新疆（しんきょ

う）の問題で、これはイスラム教と関わり
のある問題です。六番目はチベット問題で、チ
ベット仏教と関わりのある問題です。七番目
は台湾問題。これは二つの制度に関わること
です。八番目は中国とインドの問題で、これ
は国境、国境の区画の問題とかかわりがあり
ます。九つ目は、中国は多民族の国家であり
ます。多民族、多くの民族がいるということ
で、漢民族と少数民族がいるわけですが、そ
の少数民族の中でも様々な問題が生じてい
るということです。十番目はおそらく皆さま
も大変関心の高いであろうと思われる香港
の問題です。これらのあらゆる問題は中国の
周辺と関わる問題であり、国際問題でもあり、
また中国の内部の問題でもあるのです。

今、中国の歴史学会では、五つのキーワ
ードについて語る現象が大変際立ってきてい
ます。五つのキーワードとは領域、民族、周
辺、国家、アイデンティティの五つです。
私はこの本を書くに当たって、伝統的あるい
は歴史的な世界観、そして国際、国境、歴史、
周辺といった五つのチャプターに分けて書
きました。この『中国再考』という本を書く
にあたりまして、私の考えたことは中国の再
認識を試みようということでした。中国に対
する再認識を四つの側面から書いています。

四つの側面から中国を再認識する

葛 まず、この本の中では、中国の長い歴
史の時期において民族は融合しあってきた、
そして領域は常に変動してきた、そして文化
の構成は多元的であったということを議論
したわけです。もう一つは、現代の中国の国
家というのはヨーロッパや日本とは違う脈
絡があるんですね。ヨーロッパや日本のよう
な一つの脈絡ではありませんでした。中国の
場合は二つの脈絡があったと。例えば一般的
にヨーロッパなどを見ますと、帝国から民族
国家へという転換があったという脈絡だっ
たのです。しかし中国の場合は、一つは「天
下から国家へ」という転換、そしていわゆる
四裔（しえい＝諸民族）を中華に入れる、つ
まり周辺のさまざまな民族を中華という

ころに溶け込ませるという、そのような二つのことが重なり合っていたと言えるのです。このような二つの脈絡があったことから大変特別な中国が形成されました。

三つ目は、この本の中で紹介している内容として三つ目のことですけども、周辺の諸国と中国は政治だけではなく、文化の面でもますます分離してきている、バラバラになってきているということを紹介しています。特にこの本では東アジア各国の間の文化、アイデンティティーが16世紀、17世紀以降、分離してきているということを、一章を設けて記しています。

4番目は、日本の読者、あるいは海外の読者に中国を理解してほしいというメッセージです。実はこの本は英語版に翻訳作業中ですので、世界各国の読者にぜひ、中国について理解をしてほしいということで紹介しておりますのは、現代の中国は政治、文化で大変難しいジレンマ、難しい状態にあるということを紹介しています。以上の四つの側面があるわけですが、次に一つ一つ少し詳しくご紹介したいと思います。

中国の特殊な歴史と民族問題

葛 まず、なぜ私がこの本の中でわざわざ民族の融合や領域の変動、文化の多元化について書かなければいけなかったのか、書いたのかということですが、それは中国人の伝統的な考え方を変えたいというのか、これにちょっと予防線を張るというのでしょうか、そういったことがしたいと思ったからです。どういった伝統的な考え方かといいますと、中国イコール天下であると。朝貢（ちょうこう）体制があったし、冊封（さくほう）の制度があったと。あるいは中国というのは東アジアの文化の源であり中国が中心であった。そして漢字文化圏がそういったところで形成されていたという考え方に一石を投じるということが一つあります。

この薄い小さな本ではありますが、まず一章をもうけて歴史的に領域がどのように変化したか、そして文化がどう変化したか、な

どについて考察してきております。知らず知らずのうちにというのでしょうか、自覚がないとしても、漢民族の中国意識ということだけではないという問題を提起しています。というのは領域を見ても中心的な地域以外の、その他のところにも目を配らなければいけないと思いました。ですから軽々しく歴史的な視点から領土について語るのはいかななものか、と私は考えたのです。またもう一つは文化的にも中華思想あるいは漢民族の文化だけではなく、そのほかの民族の文化にも目を向けるべきだし、より下層にある末端の人たちにも目を向けるべきだし、他の宗教にも目を向けるべきであると。そうすることによって初めて文化は多元的と言えるのだということを指摘したわけです。

今、中国はさまざまなトラブルを抱えていますが、その少なからぬトラブルは歴史にその源があります。中国の歴史について理解のある方であればご承知のことだと思いますが、実際に中国は漢の時代から唐の時代にかけて、天下としての帝国は大変広大なものでした。しかし宋の時代になると、これは漢族の国となり、その版図、地方地域はそれほど大きなものではなくなるのです。

宋の時代、つまり10世紀から13、14世紀ででしょうか、10世紀から13世紀の300年の間に、次第に漢民族の国家が形成され、それと同時に周辺は周辺で各国が並立するという国際秩序が生まれたのです。

しかし13世紀以降になると、中国の歴史は大変奇妙な動きというか変遷を遂げてきます。と申しますのは13世紀以降になると、モンゴル人がモンゴル帝国を打ち立てます。そして明の時代になると、モンゴルの帝国がまた漢民族の方に戻って来たりするわけです。一方、清の時代になるとさまざまなエスニックグループがそれぞれ集まった形の大帝国を形成するようになったわけです。こうしてみると、中国には歴史的には他の地域とはずいぶん特徴の異なる歴史の変遷があったわけです。

モンゴルの時代は中国と周辺の国々の間

でさまざまなトラブルが起きました。そして明の時代になると西側から西洋人が入ってきたことによって新たな問題が持ち込まれてきました。そして清の時代、これは版図ですね、区域・地域というのが拡大するので、内部のエスニックグループの問題が生じてきました。このように周辺の問題、国際問題、そして内部のエスニックグループの問題はいずれも歴史と関係があることが分かります。

近代中国は「多民族国家」の伝統を引き継ぐ

葛 以上が第一の部分の話です。二番目にお話ししたいのは現代中国の国家の形成についてです。現代中国、言い換えるなら中華民国ですが、これは大清帝国を継承したものです。ということは言い換えると、さきほど私が掲げた三つの問題を検証したということになるわけです。過去、西側の学者の見方はこういうものでした。ご紹介しますと、近代の中国は、その国家形成のプロセスとして天下から国家へと変わるプロセスであったと。すなわちそれは朝貢体制の宗主国という立場から現代的な国家、一国家に変わっていったのだと。つまり伝統的な帝国から現代的な近代的な民族国家に変わったのだという考え方なのですが、私はこの西側の西洋の学者のこのような考え方はあまりにも単一的ではないかと思います。

私は、実際に近代の中国というのは、多くの四裔を中華におさめるという考え方があった通り、大清帝国から中華民国に、そして今の中華人民共和国に至るまで実際には多くの民族を取り込んで、という考え方があったわけです。それは五族協和というような言葉で語ることができるのですが、すなわち満、満州の満、蒙、蒙古の蒙、そして回族の回、そして蔵というのはチベットの蔵、そして漢、漢民族の漢、もう一つ、私はミャオ族の苗という字、その民族を加えるべきだと思うのですが、いずれにしてもこうした多民族を集結させ、ともに発展するのだという考えが中国

はあるわけです。これは、中華民族は一つなのだという考えで、中国の学者、政治家が追い求めているところでもあるし、言い換えるならば大清帝国以来の多民族の伝統を引き継いでいる考え方でもあるのです。

明の時代の地図を見ると、範囲はかなり限られた小さいものです。明の時代というのは限られた有限の領域であったわけで、これは漢民族の王朝だったわけです。しかし、清の時代には版図が大きくなる。現代の領域、領土の基礎になっていますが、大変大きい。『清史稿』の中で中国の領域について書かれたものによりますと、中国は東は庫頁島（カラフト）まで、西は新疆の疏勒（しょうろく）というところから葱嶺（そうれい）というところまで、北は外興安嶺まで、南は広東、または今で言う海南までということであります。つまり、これを見てみると中華民国あるいは中華人民共和国はこの領域を受け入れるのだということを認めて領有しているわけです。よって国家としても五族協和、これを許そうではないか、認めようではないかというふうになっているわけです。

「現代国家」と「帝国」の混在

葛 こうして見ると、中国は大変特別な国家として形成されてきたことが分かります。ヨーロッパの近代国家の形成、あるいは東洋の各現代国家の形成とは異なるわけです。私は以前書いた『宅茲（たくじ）中国』という本の中でこういう記述をしておりますのでご紹介しますと、「中国はヨーロッパとは異なり帝国から民族国家へと変わったのではない。中国の場合は国の中に帝国の意識があり、そして帝国の意識の中に現代国家というものも備えている。つまり中国の場合は、現代国家と帝国というものが混在している」と。このように私は理解しているのです。ですから私は西側の学者の皆さま、日本の学者の皆さまに、中国のこの特殊性を是非理解していただければ、と思うわけです。

私はここ数年、欧米に行く機会もあるし、アジアなら韓国を訪問したりする機会もあ

るのですが、よく学者同士の交流の中で聞かれます。「中国って一体、どんな国家なのですか」と。「現代国家のようでもあるけれど、伝統的な帝国のようでもありますね」と聞かれるんです。これに対して私は三つの側面、三つの言葉をもって回答しています。まず一つは伝統帝国はすでに崩壊している。しかし歴史の中の記憶としての「天朝」は依然として観念の世界の中では存在し続けていると。これは中国の観念の世界の中でということです。もう一つは清朝末期以降、大変大きな西側からの衝撃を受けたために、中国はやむなく「伝統内の変化」から「伝統外の変化」を余儀なくされたということです。どういうことかといいますと、やはり中国の外側での変化がとても大きかったので、そうしたもとで中国も現代国家へと変わっていくこととなったという意味合いです。

中国の現代国家の形成がこれだけ特殊なものとなったのは、実はその原因は日本にあるのです。それは1894年の甲午戦争、つまり日清戦争、あるいは第二次世界大戦などを経て中国は民族的に、あるいは国家としての観念、そして実際の戦術という面で、やはりこれは西側の列強、これは日本も含めて、特に日本を含めてですけども中国に対してさまざまな圧力があつたということから、中国としてはそれを跳ね返すためにも膨大な国、集権国家というものに生まれ変わらざるを得なかったわけです。特別な中国が現代中国に変わる中で、いろいろなトラブルも起きましたし、また思想上の問題も生じました。

中国は「天朝」の想像から脱すべきだ

葛 次に中国と周辺の問題について、とりわけ中国と日本、韓国そしてベトナムとの関係について述べたいと思います。これは歴史的に見ますが、実は中国と周辺諸国は随分昔から同じ文化圏ではないと言えると思うのです。日本の研究者の中には「アジアは一つ」とおっしゃる方もいますが、アジアは実際には一つではないのです。というのは、日本はかねてから中国の文化というのを必ずしも

認めない側面もあり、朝鮮も中国に対しては様々な異なる見方があり、中越間でもベトナムは常々様々な矛盾を中国との間で抱いてきているわけです。

一冊の本をお読みいただければ、その辺のところがよく分かるのですが、その本は日本で17世紀の中ごろに出た『華夷変態』という本です。その中では中国を文明的ではない、むしろ野蛮だと指摘しているのです。ですから中国と周辺国はそもそもは完全に一体化したものではなかった、つまり周辺国との間でいろいろな矛盾もはらんでいたということを私は中国の読者向けに語っているわけです。もはや天朝ではない現実から、天朝を想像するというか、そういう段階にとどまっていはいけないのだ、中国は東アジアの文化の提供者ではなかったのだと語っているのです。

同時に私は海外の読者、特に日本の読者にも呼びかけていることがあります。それは、中国は絶えず分割され、侵略され、侮辱を受けた歴史があることをぜひ記憶にとどめてほしいということです。百年余りの間、中国は絶えず分割され、そして侵略を受けてきました。清朝末期の地図を見れば、各国が中国を占領しようとしていることが分かります。すなわち第二次世界大戦ころの地図を見れば、中国の多くの土地、領域が各国によって分割されているのが分かります。ですから私の見解は、中国はまず天朝の想像から脱しなければいけない。それと同時に海外の皆さまには中国に対して理解を深めていただきたいということです。

目指すべきは「現代的民族国家」か「大一統」か

葛 あともう一つは4番目の話題です。ここは簡単に申し上げたいのですが、中国は今さまざまな困難を抱えています。でも、だからと言って中国が崛起（くっき）した、つまり台頭したというふうに思わないでいただきたい。中国がさまざまな難しい矛盾を抱えていることを理解してほしいのです。現代に

において中国は国家、文化の面で様々な矛盾やジレンマを抱えています。まずジレンマです。最初は現代ということで考えると、中国は西側の現代化、近代化の道を歩むべきなのか、それとは全く異なる新しい、西側とは異なる現代化＝近代化の道を進むべきなのかについて今、中国では大変大きな議論が起きています。二つ目は国家をめぐる様々な問題です。中国は現代的な民族国家を目指すのか、あるいは漢や唐の時代以降、特に清朝以来の「大一統」の帝国を目指すべきかということです。中国ではこの問題についても大変大きな議論が巻き起こっています。

もう一つは文化の側面での様々な議論ですが、これも大変難しい困難に直面しているわけです。すなわち我々は近代西洋の文化的価値を受け入れればそれでいいのか、あるいは中国の文化の特殊性を守りながら、少なくとも中国の文化が世界でそれなりの地位を保てるように努力すべきなのか、あるいは東アジア、アジアで中国の文化の崇高な地位を回復すべきなのか。これも今、中国の学界や文化関係領域、政治の世界で大変大きな議論となっています。これは我々が世界に溶け込むのか、世界が中国の特殊性を受け入れるべきなのか、という問題でもあるのです。

「歴史」「理性」「他者」がキーワード

葛 最後に私が述べたいことです。今、多くの人は中国が台頭した、崛起した、世界で大変大きな力をつけたと思っていますが、問題もあるのです。中国は本当にアメリカと同じような世界の大国と言えるのでしょうか。私は中国人は自己認識として警戒感を持つべきだと思っています。つまり中国の今の状況をもっと慎重に考え、中国がすでに台頭し大国になったと錯覚してはいけないということです。そうでないと隣人たちと仲良くすることもできません。また周りの人たちに安心できると思ってもらえなくなる。私が今回この小さな本を書いた目的は、改めて中国、そしてアジアの共通の認識を再構築しようではないかと呼びかけたかったからです。

まとめとして、常々強調したいキーワードが三つあるということを申し上げて結びにしたいと思います。三つのキーワードの最初は「歴史」です。今ある諸問題は歴史と関わりのある問題が多い。もう一つの言葉は「理性」です。とりわけ国と国との関係进行处理するうえでは理性が必要です。そして三つ目のキーワードは「他者」です。他者を尊重することが大切であろうと。他者が大きいのか、小さいか、強いのか、弱いのかということにかかわらず、ぜひとも我々は他者の目から自分を認識することを学ばなければいけないと思っています。これが今日、私が皆さまにお話ししたい内容です。ご清聴ありがとうございます。

《質疑応答》

司会 葛先生、どうもありがとうございます。それでは質疑に移ります。最初に司会者から質問します。「大国の崛起」という言葉や、習近平国家主席が「中国の夢」と言ったり「中華民族の偉大なる復興」と言うと、周辺国は圧力を感じます。外から見ていると、中国は世界の普遍的価値とは違う価値観を追求する特別な国家になっていく方向が強いのではないかと映ります。実際に中国国内で議論をしていてどうお感じでしょうか。普遍的価値の方が重いという方が学会の主流になることはあるのでしょうか。

必要とされているのは謙虚さ

葛 中国人には今、確かに中国が台頭した、崛起した、大国になった、力もつけた、強くなったと思う人が多いと思います。でも私は個人的には、そうではなく、私たちは慎重に気をつけなければならないと考えているのです。実際に中国には今、三つの課題があります。解決しないと、とても強国になれないと思うような三つの問題を抱えていると考えています。一つは貧富の格差の問題です。今中国にはお金持ちも大変増えていますが、

それよりも数多くの貧しい人がおり、お金を持っていない人がいます。もう一つは14億人の人口を抱える中国ですから、何事も平均して1人当たりで見ると中国は必ずしも強い国ではない。1人当たり平均所得もまだまだ低いレベルにあります。三つ目は中国の地域格差です。東西の格差や都市部と農村の格差も大変大きい。そうしたことから見て私は個人的には中国が強大国になったとはとても言えない、特に中国がアメリカ同様に強く、G2になっているとは思いません。むしろ今、中国が必要としているのは謙虚さ、また高圧的に出るのではなく低姿勢でいること、隣国、世界と仲良くすることではないかと思っています。

司会 ありがとうございます。先生のような理性的な考えの方がもっと中国で増えることを期待します。

葛 学者には学者の立場があり、学者なりの思考方法があるわけです。ただ学术界の人間、学界の人間に政治家の代わりはできませんし、一般庶民、一般の民衆の代表にもなりえないと思います。学者は理性的でなければいけない、理性がありますが、一般の人たちとは感情的なところが強い。政治家は現実の利益を推し量ることが多いと思うのです。学者の理性、政治家の利害追求、一般民衆の感情的なところ、それぞれが異なっていると思います。

司会 ありがとうございます。それでは会場からの質問を受けたいと思います。

(以下、会場との質疑応答のやりとり)

質問 二つお聞きします。一つは中国には現代国家としてのイメージと、天下というか帝国主義的なイメージがまだあるということですが、南シナ海、東シナ海問題には帝国主義的なイメージが反映されているのかと思いました。先生は周辺の国に中国の心象を理解して欲しいとおっしゃられますが、周辺

諸国が拡張主義的なイメージを持っていたらどう対応したらいいのでしょうか。もう一点は今日、習近平国家主席と安倍首相が首脳会談を開けたことです。中国から見てこのタイミングで安倍首相と会う決断をした背景にはどんな理由があると思っていますか。

領土問題は理性的な対応が必要

葛 最初の質問ですが、中国の天下の観点、あるいは帝国というものの性格と関係のある問題だと思います。それと中国の現代国家としての領土や領海の問題でもあるわけです。現代国家としてそれまでの帝国ということから抜け出して成長し広がりを見せると、必然的に領土問題が関わってくると思います。私は領土争いは必ずしも全てが帝国の意識から来ているとは思いません。帝国の意識と関係があるかどうかは、紛争地域の個別問題をどう理解するかに関わっていると思います。例えば雲南省や中国の東北部は当然ながら現代中国の国家としての領土ということで我々は「中国のものだ」と堅持するわけです。これは譲れないと。なぜかという、現代中国が清の時代から、大清の時代から引き継いだ領域であるからです。一方、東海と南海、つまり東シナ海と南シナ海の問題ですと、これはもっと詳細な、慎重な議論が必要だと思います。例えば東海の問題は、かつての帝国の時代には領域が確定されていなかったからです。東北の例ですと、実は今の中国東北地方よりさらに北の部分には、かつて条約でロシアに占領されてしまっているところがあります。

では、我々はこれを取り戻すべきなのかということですが、領土については特別な議論が必要ではないかと思います。私は個人的には「天下」の体系、観点、意識というものに賛同しませんが、帝国の意識として取り戻すのが正しいのか、あるいは帝国の時代に中国の領域だったから天下意識にかかわりなく、取り戻すのがいいのか、というのは別問題だと思います。それが一つ目のご質問への答えです。

二つ目のご質問ですが、申し訳ありませんが、私は大学教授という仕事をしております関係上、本当に政治の特にトップの人たちのことには全く関わりがないので、どのような背景のもとでなぜ今、首脳会談が実現したかということは本当に分かりかねるわけです。もちろん学者としては、さっきも国と国の間というのは理性というもの、理性的な行動、考えを堅持すべきだと申し上げました。ですので、今般、両国の指導者が会談をして顔を合わせたことは大変うれしく思います。とうとうこれまでの硬直した状況が打破されたわけですから、これは嬉しいのですが、ではなぜ今なのか、何を話したのか、私が知るすべはないということです。中国では、一般人が中国の政府高官のことについてほとんど知らない状態にいるというのが現状です。

さきほどの質問にもう少し補足させていただきますと、領土や領海の問題というのは、現代では交渉あるいは条約を通じて解決すべきだと思います。もしかしたら中国は若干の帝国の意識であるとか、いわゆる天朝意識があるのかもしれませんが、事実上、国と国との間の紛争事項を処理するに当たっては、やはり交渉、条約に頼る以外にないわけです。それは本当に仕方ない、それ以外に方法はないということが事実だと思います。一方、政治家が物事を考えるときは利益優先だと言っていいと思います。そうではあるが、利益を考えるときには理性的に考えるということもするわけですから、利益と理性というのが重なり合うこともあると思います。例えば、紛争とか本当の衝突を回避することも理性的に考えなくてはいけないでしょうし、また双方が受け入れられるような答えを導き出すにはどうしたらいいか、ということに理性が必要だと思います。もちろん我々も政治家に何でもかんでも要求を突きつけるということではできません。ですが、利益を考える以上、理性的な考えは不可欠だろうと思っています。

質問 民族自決の原則についてどうお考えでしょうか。これはレーニンとかウィルソ

ンが言い出したことなので、そう意味では西欧的価値観かも知れませんが、中国には帝国と現代国家が混在しているとおっしゃって、先ほど東北の例を持ち出されました。東北にはかつて満州民族がいて独自の民族を形成していたのですが、今は民族的アイデンティティーは薄まっていると伝えられています。西の方では新疆ウイグルやチベットは相当強い民族的アイデンティティーを持っていて、独立ないし自治強化の要求を出しています。この辺の状況についてどうお考えでしょうか。

「民族自決」は万能薬ではない

葛 民族自決の問題はそもそも西側近代から出てきた観念です。特にヨーロッパです。イタリアのマッツィーニという人が言ったのは、一つの民族に一つの国家しかありえないと。しかし私は、これは理想に過ぎず現実にはそうならないと思います。というのは例えば、ヨーロッパでも実際には一つの国であっても複数の民族が一緒に暮らしている国が多々あります。例えばベルギーにはドイツ語を話す人、オランダ語を話す人、フランス語を話す人がいます。私は、民族自決は万能薬ではないと思います。例えばウクライナのクリミアの問題もスペインのカタルーニャの問題もあり、カナダのフランス語圏の問題もあり、記憶に新しいのではセルビアの分裂の問題などもあります。

ですから民族自決は理想ではありますが、民族国家はそれだけで形成されるわけではありません。一民族一国家はどこででもできるわけではないので、具体的にその歴史的な特徴を見る必要があると思います。すでに現代の国家として形成されている国の中に複数の民族があるからといって、一つ一つ分割し小さな国に細分化することはできないわけです。で、実際に中国の新疆を見ても、そこは一つの民族だけではないのです。ウイグル族というのは最大の民族ですが、それ以外にカザフ族やタジク族がいます。ではどうしたらいいのか、ということですが、今、世界

がこれだけ融合し、交流が進む中で、やはり民族自決ということだけであらゆる問題を解決することはできないと思っております。私は西側の一部で、民族自決原則があたかも変えることのできない普遍的な重要な考え方だと提唱する人がいるがゆえに戦争が起きたり、分裂が起きたことがあるのではないかと考えています。私はアメリカのルシアン・パイという学者が言ったことに大変感銘を受けております。パイ氏が述べたのは、民族のエスニックのアイデンティティーは、時には国家を建立、打ち立てることができるが、時には国家をぶち壊すこともある、ということです。

質問 昨年来、訪中すると、中国各地で中国の若い女性をあしらった「中国の夢」という巨大ポスターが目立ちます。中国共産党の正統性をうたうプロパガンダポスターも一緒に貼ってあります。これを中国の方、特に上海の文化人に聞くと、「中国の夢」は「習近平の夢だ」という答えが返ってきました。中国建国 65 年になりますが、マルクス・レーニン主義に基づく中国共産党の 60 年の支配が中国の伝統的な文化を変質させているのか、質を変えているのか、習近平の夢は天下主義に基づく中国伝統のものなのか。その辺のところをおうかがいしたいと思います。

習近平氏の「中国の夢」とは

葛 私は「中国の夢」には、二つの側面があると思います。一つはこの「中国の夢」というのは、清朝末期のころから強く豊かになりたいという、中国の全ての人々の願いだったわけです。清朝末期から中国は大変弱いために西側列強、日本から様々な迫害を受け、いじめ、侮辱を受けたわけです。豊かになり強くなること、つまり富強は長年の中国の理想なのです。あるアメリカの研究者が清朝末期の中国について書いた本がありますが、そのタイトルが富強を求める、豊かで強くなるのを求める、という本です。このように長年にわたる夢、中国の理想として中国が豊かになり強くなるということがあったわけです。

これが一つ。 もう一つは習近平氏の出している「中国の夢」、チャイナ・ドリームですね。もしそこで言う中国人の百年来の理想ということであるのならば、それはとても素晴らしいと思います。みんなで豊かになり、強くなるというのはいいんです。ただ私は政治家ではなく、共産党員でもありませんから、じゃあ習近平氏が本当にどういうことを考えてこれを出しているのかということは、彼に代わってここで答えることはもちろんできないわけです。百年来の皆の夢がそのまま語られているということであればいいと思います。中国共産党が政権を取って 65 年ですが、それより前、中華民国の時代、あるいは中華民国になる前の大清帝国の光緒帝とか西太后の時代にも強く豊かになりたいという理想があったわけです。私はそれとも多少、何かの関係があるんじゃないかとは思っています。今の現代で打ち出されている「中国の夢」には政治的意義、政治的目的は当然あると思います。というのは中国が豊かになり強くなれば、共産党や今の政府は合法性や合理性を得ることになるわけですから、もちろん政治的な目的はあると思います。私が言いたいのは、「中国の夢」というネーミングはあまり重要ではなく、逆にこれをどう実現するか、どういう方法を取るのか、どのような制度がそのために構築されるのか、ということが重要なのだということです。一個人であるとか、一党派、一政府だけが強く豊かになるのではなく、万人が共に豊かになるということであれば、大変合理的な考え方ではないかと思っています。

司会 この辺で今日の記者会見を終わらせていただきます。さきほど葛先生おっしゃっていましたが、歴史と理性をもって、また他者を尊重するという言葉をいただきました。本当にありがとうございました。

(了)